

平成21年度 医療事故等行為別件数及び重大な医療事故の概要

(1) 医療事故等 行為別件数

平成21年度	レベル	インシデント				アクシデント								
		0	1	2	計	3		4		5		計		
		a		b		a		b		a			b	
薬剤		40	273	19	332	0	2	0	0	0	0	0	0	2
輸血		8	2	1	11	0	0	0	0	0	0	0	0	0
治療・処置		11	29	6	46	10	2	0	0	1	0	0	0	13
医療機器等		6	12	5	23	3	0	0	0	0	0	0	0	3
ドレーンチューブ		1	22	24	47	1	1	0	0	1	0	0	0	3
検査		13	22	1	36	0	0	0	0	0	0	0	0	0
療養上の世話		21	293	12	326	5	0	2	0	0	0	0	0	7
その他		18	29	5	52	1	1	0	0	2	0	0	0	4
計		118	682	73	873	20	6	2	0	4	0	0	0	32

合計 905

障害区分(レベル)	内 容	
インシデント	レベル0	誤った医療行為が実施される前に気がつき患者には実施されなかった場合
	レベル1	事故が起こったが、患者には影響がなかった場合
	レベル2	事故により患者に何らかの影響を与えた可能性があり観察の強化や検査の必要性が生じた場合
アクシデント	レベル3	事故により、軽微な処置・治療を要した場合
	レベル4	事故により、患者に心身の障害が残った場合又は濃厚な処置・治療を要した場合
	レベル5	事故による死亡
	a	明らかに誤った医療行為又は管理は認められない場合
	b	明らかに誤った医療行為又は管理に起因している場合

注) 平成21年度から日本医療機能評価機構の医療事故情報収集事業へ参加したことで、障害区分(レベル)が変更となった。年度比較をするため平成19年度、20年度は平成21年度の新障害区分(レベル)で表示した。

(2) 重大な医療事故の概要

○ 平成21年度

発 生	平成21年6月
概 要	80才代女性：骨盤内膿瘍。検温のため訪室すると、患者から、「車椅子トイレで転倒し、その後、左大腿部が痛い」という訴えがあった。レントゲン撮影の結果、左大腿骨頸部骨折が認められた。転倒の前日夜、不眠が続いていたため眠剤を初めて服用され、履物はサンダルであった。
対 応	左大腿骨頸部骨折に対しては金属固定手術が行われた。また患者へは、①サンダルでなく、滑りにくい履物を使用していただくこと、②眠剤使用時は転倒する危険があり、ふらつく時はナースコールをしていただくように説明した。また、病院側としても、患者がサンダル・スリッパへ履き替えないよう注意を強化した。
発 生	平成21年7月
概 要	70才代男性：下咽頭癌、2型糖尿病。7階病棟の外壁避難路柵から人が落下するところを目撃したと、看護師に通報があった。直ちに警備員が現場に急行したところ、人が倒れているのを発見。

対 応	警察に連絡するとともに、心臓マッサージ及びAED等の応急救命処置を現場で行った。その後、救急病棟に搬送し、救命処置を継続したが、心拍再開せず、死亡を確認した。
発 生	平成21年8月
概 要	50才代女性：敗血症・肺炎治療中の患者が呼吸不全となり、人工呼吸器を装着。看護師二人でオムツ交換後、経皮的酸素飽和度（SpO2）が90%以下となり、当直医が気切チューブを交換した。しかし、SpO2は改善せず、心拍数も40台/分まで低下したために、気管内挿管に変更した。その後もSpO2は低下し、心肺停止状態となり、蘇生術にも反応せず亡くなられた。死後のCT撮影では、両側気胸と皮下気腫を認めた。
対 応	<ul style="list-style-type: none"> ・専門の医師と看護師、臨床工学技士で気管切開患者に対するラウンドを行い、呼吸管理をサポートする。 ・気切チューブ患者に対してのオムツ交換等は、看護師3名で行う。
発 生	平成21年9月
概 要	70才代男性：肺癌末期 看護師と会話し、特に著変もなく体温・心拍数とも正常範囲であったが、15分後、病室を訪れた際、ベッドに倒れ尿失禁状態で横たわっている患者を発見。呼吸は停止しており、脈拍も触れない状態であった。蘇生術を行ったが、心拍再開せず、亡くなられた。
対 応	・家族には予後がよくないことは説明していたが、正確に死期を特定することは困難であった。
発 生	平成21年9月
概 要	80才代女性：悪性リンパ腫。同室の別患者からナースコールがあり訪室すると、患者が部屋の洗面所前の床に座り込んでいた。ポータブルトイレで排便後、手を洗う際に靴が滑り、倒れてしまった、とのことであった。レントゲン撮影の結果、右大腿部の骨折が認められた。
対 応	<ul style="list-style-type: none"> ・骨接合手術が行われた。 ・ベッド柵を4柵に変更した。 ・訪室の回数を増やした。
発 生	平成21年11月
概 要	80才代女性：慢性心不全、高血圧症、糖尿病 他病院から急性冠症候群の診断で救急搬送された。冠動脈造影検査を行ったところ、高度の冠動脈硬化が認められた。そのため経皮的冠動脈手術を行ったが、管を冠動脈に挿入した際、動脈壁の解離が生じ、広範な急性心筋梗塞が起り、心停止となった。すぐに蘇生術を行い、心拍が再開した。しかし3日後に再び心肺停止となったため蘇生術を行ったが、心拍再開せず亡くなられた。
対 応	血管造影では開始直後に危険な偶発症が起こる可能性があるため、血管造影検査は安全体制を十分に整えて臨む。